

谷端遺跡発掘調査報告書

平成 2 年度

前橋市教育委員会

谷端遺跡発掘調査報告書

平成 2 年度

前橋市教育委員会

序

水と緑と詩の街、群馬県の県庁所在地前橋市は、関東平野の北西端に在り、北に名峰赤城山を望み、市内の中心部を坂東太郎の名を冠する利根川が貫流する自然豊かな北関東地方における中核都市の一つであります。

前橋市の歴史は古く、今から1万5千年前以上の旧石器時代にまで遡ることが最近の発掘調査の結果から明らかになりました。

長い歴史の中でも特に古墳時代においては、市域に1,000基を超すほどの大小様々な古墳がつくられ、西の大和に対し、東の毛野と言われるほどの一大勢力の中心地でもありました。そのようなことから市域には特に古墳時代の遺跡が顕著に分布しており、今回的小規模土地改良に伴う事前の発掘調査でも古墳時代の住居跡が調査されております。

農業基盤整備事業、特に土地改良事業は農業の近代化・活性化に欠かすことが出来ないものと認識しております。事業の実施に際しては、埋蔵文化財の保護の立場とは相反する場面が多く見られるわけですが、今回の調査にあたっては、地元土地改良関係の方々及び市農政当局の全面的な協力もあり、予定どおり実施することができました。

本報告書を刊行するにあたり、御協力いただきました関係者各位地権者及び発掘調査に従事された方々に感謝いたしますとともに本報告書が上沖地区の歴史を解明する一助となり、斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いと存じます。

平成3年3月20日

前橋市教育委員会
教育長岡本信正

例 言

1. 本書は、上沖土地改良事業に伴う道路新設に伴う調査報告書である。
2. 本遺跡は、前橋市小神明町185-1他4筆に所在し、略称は（2D-4）とする。
調査面積は150m²である。
3. 発掘調査は前橋市教育委員会で実施した。調査期間は平成2年10月3日～10月29日である。
調査は文化財保護課埋蔵文化財係、井野誠一、新保一美があたった。
4. 本書の編集・執筆は井野誠一が行った。
5. 調査時には、土地改良課、上沖土地改良区に多大なご協力を得た。
6. 本遺跡の調査・整理に御協力をいただいた方は以下に記す方々である。
調査 飯島勝亥、八木原健明、田中二郎、八木原徳宝、岩田明夫、田中芳男、
岩田かしよ、八木原トク子、田中 幸、岩田はなえ、八木原美恵子、市川節子
整理 飯島勝亥、大塚美智子、松田富美子、大沢まさ江、船津明美
7. 関係図面及び遺物の保管は、前橋市教育委員会文化財保護課が行っている。

凡 例

1. 各遺構の略称は次の通りである。
H：土師器使用の竪穴式住居跡 P：ピット W：溝状遺構
2. 遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。
遺構：1/60 遺物：1/4 全体図：1/1,200
3. 遺構平面図及び文章中の方位は、全て真北を基準とする。
4. 7号住居跡は調査・整理のなかで欠番とした。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
I 調査に至る経緯	2
II 遺跡の位置と環境	2
III 調 査 の 経 過	3
IV 遺 構 と 遺 物	5
V ま と め	12

図 版 目 次

調査地位置図	3
調査区全体図	4
1号住居跡 平面図・地層断面図	5
2号住居跡 平面図・地層断面図	6
3号住居跡 平面図・地層断面図	7
4号住居跡 平面図・地層断面図	8
6号住居跡 平面図・地層断面図	9
9号住居跡 平面図・地層断面図	10
8号住居跡 平面図・地層断面図	11
遺 物 図 版	12
写 真 図 版	18

I 調査に至る経過

本遺跡は前橋市小神明町に所在するが、昭和50年代より土地改良事業が次々と進められてきた地区である。北側の小神明遺跡や東の端氣遺跡も土地改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査が実施されたところである。

本遺跡地については、平成2年2月7日付で表面調査依頼が提出され、同年4月10日に調査を実施したところ、遺物の散布がみられたので、試掘調査を実施することとなった。

同年9月20日付で試掘調査依頼が提出され、同年9月22~25日に試掘調査が実施された。

試掘調査の結果竪穴住居跡・溝状遺構が検出された。依頼者との協議の結果、調査については緊急調査として文化財保護課が調査を実施し、費用については上沖土地改良共同施行で負担することとなった。

調査対象となったのは地盤の掘削が行われる道路敷部分とし、その他については抜根のみで表土の掘削等は行わないとのことで除外した。

II 位置と環境

本遺跡は、赤城山南麓で、旧利根川の左岸の台地上に位置する。

前橋市街地を地形的に分けると利根川の東側では、赤城山の斜面（北側）と、洪積台地の前橋台地（南側）、両者の中間の広瀬川沖積低地に分かれる。

本遺跡の所在する赤城山南斜面は赤城山噴出物を基盤とし、ローム層が厚く堆積している。その上に耕作土・覆土も厚く形成されており、遺構の遺存度が良好な地域である。

谷端遺跡は前橋市小神明町185-1他4筆に所在するが、一帯は平坦であり高低差は見られない。台地は小河川により分断されており、小河川は比較的深い谷を形成している。ただし、遺跡の状況からみると、遺跡所在時には比較的浅かったとみられる。

周辺は遺跡の密度の高いところで、北に接して小神明土地改良に伴う大明神遺跡、東に接して端氣土地改良に伴う端氣遺跡群、北東には芳賀西部団地遺跡が所在する。

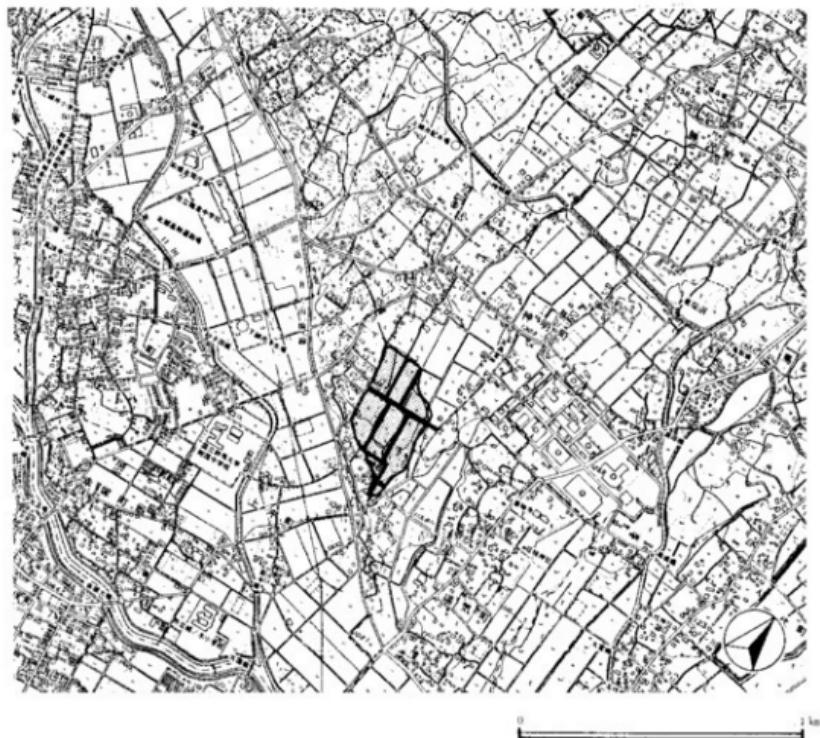
谷端遺跡で検出された竪穴住居跡は古墳時代のものが主であるが、本遺跡の西側の字上の山には古墳が所在し、昭和21年に群大尾崎研究室により調査が実施されている。

その他にも古墳が所在したようで、削平された話や戦前に高坏が出土した話が残っている。

また、遺跡地の南西は字名が寄居と言い、一説に小神明の寄居という居館址が所在すると言われていたが、今回トレンチを設定しての試掘では遺物・遺構とも検出されなかった。

本遺跡をローム検出面での地形でみると、土地改良対象区の中央部が南北に尾根状に高くなってきており、その西側からは遺物・遺構は見られず、その東側で南北に帶状に住居跡群が存在すると考えられる。今回の調査地からは古墳時代の住居跡の検出数は6軒であるが、付近には数十軒単位での遺構の存在が考えられる。

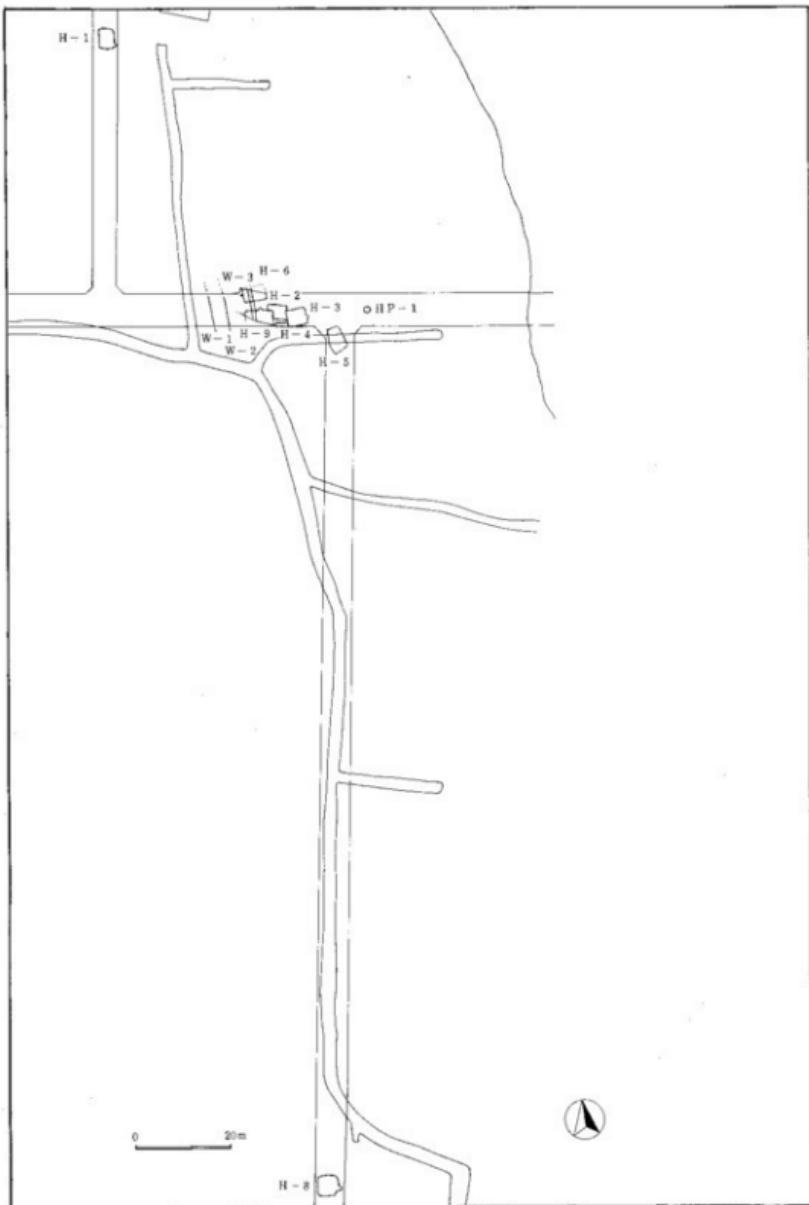
調査地位図



III 調査の経過

- 10月3日 H-8 の排土をはじめる。
10月5日 H-2 ~ 9 の排土をはじめる。
10月9日 H-2 ~ 9 地層断面の実測を始める。
10月11日 遺構精査を進める。
10月12日 各住居跡カマド精査。
10月18日 遺物平面図実測。
10月22日 カマド断面実測。
10月24日 H-1 平面図実測。
10月29日 遺構平面測量実施。調査を終了する。

調査区全体図

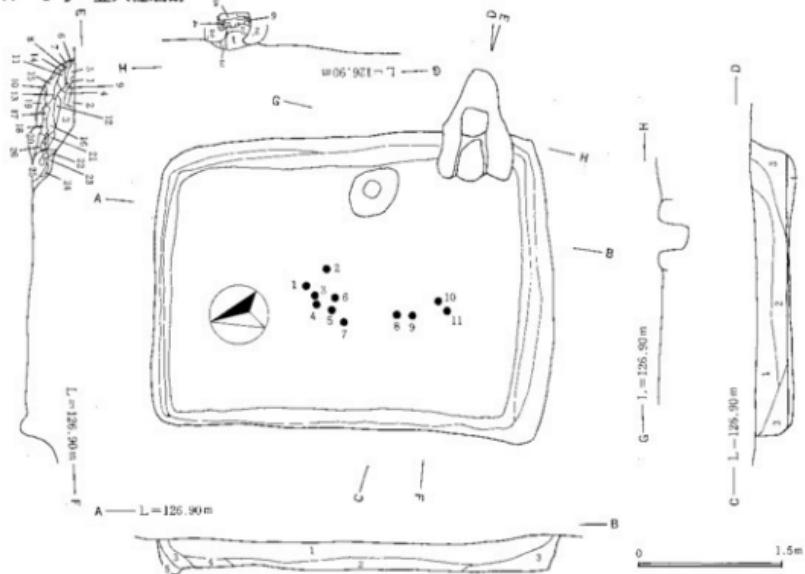


IV 遺構と遺物

I 堪穴住居跡

(1) 古墳時代

H-1号 堪穴住居跡



H-1 (カマド南北) 1. 茶褐色上砂質土。燒土塊含む。2. 白色粘土。2'. 白色粘土の燒土化。3. 茶色砂質土と燒土。4. 白色粘土と砂質土の混土。5. 黒色灰層。6. 茶褐色砂質土と白色粘土の混土。

H-1 (カマド東西) 1. 茶褐色土。2. 白色粘土と燒土の混土。3. 茶褐色土に燒土と炭化物含む。4. 茶褐色土。5. 茶褐色土に燒土、粘土混土。6. 黑色土。7. 茶褐色土。8. 茶褐色土。9. 白色粘土ブロック。10. 黑褐色土、燒土混。11. 喀褐色土、粘土、燒土、炭化物混。12. 黑褐色土、粘土、燒土、炭化物混。13. 11に似る。粘土多い。14. 砂質茶褐色土。15. 黑色土。16. 粘土。17. 茶褐色土の燒土混。18. 燃土化粘土。19. 茶褐色土。粘土まじり多い。20. 黑色土。焼土混。21. 22層に黑色土、B P灰層混。22. 喀褐色土。ローム塊混。23. 3層に似る。燒土、炭化物混。24. 灰褐色上砂質土に粘土、燒土混。25. 黑色砂質土、燒土混。26. 24層に似る。

H-1 1. 黑色土。FPを含む。2. 喀褐色土。FPを含む。3. 黑色土。FPを含む。4. ロームと黑色土の混土(貼り床)。5. 黑色土とロームの軟かい混土。

位置 調査区北側の南北幹線予定地より検出される。単独の検出であるが、地形からみると南側のH 2 ~ 9のグループに連なってゆくものと考えられる。両者の中間の畑地からは遺物の散布が多くみられる。

形状・規模 東西2.5mで南北3.6mの南北に長い長方形を呈す。隅角はほぼ直角に近い。面積は9.1m²。壁はやや角度をもつ。壁高は32~39cmを測る。

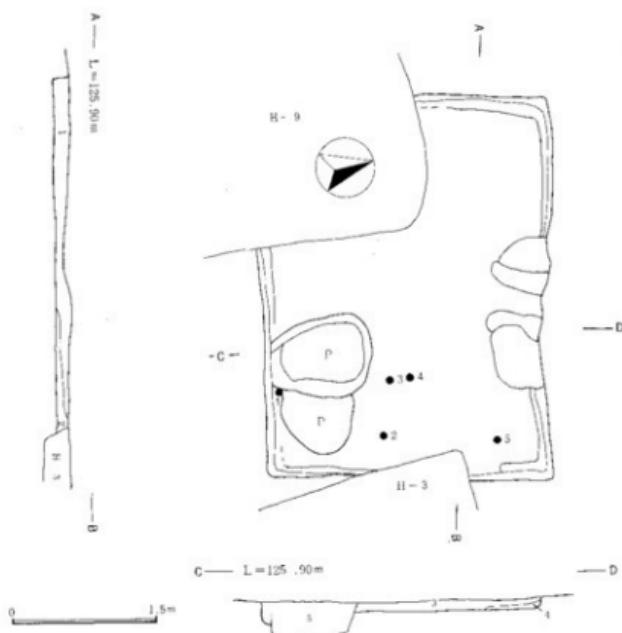
床 ほぼ全面に貼り床を施す。黒色土とロームの混土。

床面 周溝がほぼ全周する。幅6~10cm、深さ8cmである。柱穴は確認されなかった。

カマド 東壁南端。残存状況は良かった。

遺物 土師器が多く出土。古墳時代鬼高期のもの。

H-2号 穹穴住居跡



H-2 1. 茶褐色土と黒褐色土の混上。2. 茶褐色土とロームの混上。3. 黑色土と黒色土ブロックまじり。4. 黑色土にロームブロックと茶褐色土まじり。5. (土坑) 茶褐色土と黒褐色土まじり。

位置 調査区中央の東西幹線予定地より検出。H-3、H-9と重複。両方よりも古い。

形状・規模 一部重複により欠けるが、東西に長い長方形を呈す。東西3.8m、南北2.8mを測る。隅角はほぼ直角に近い。面積は重複部を含め推定10.5m²。

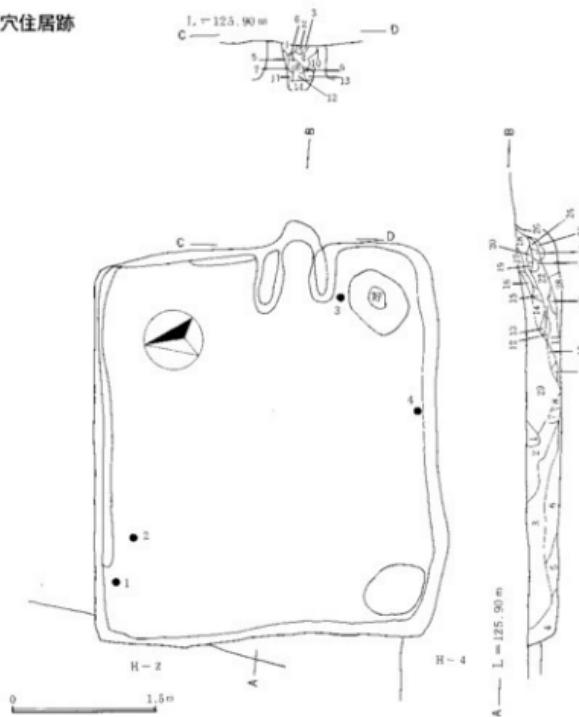
耕作による削平が進んだため壁上面とカマド北半は失われている。壁現高は45cmを測る。

床 現状では周溝が全周する。幅4~12cm、深さ5~6cmである。貼り床はない。南壁近くにピット2基をもつが、H-2との係りは不明である。ピット2基は重複しており西側が新しい。

カマド 北辺中央のやや東より、南半のみ残るが總長は痕跡から推定すると120cm程とみられる。両袖が室内に60cmほど張り出している。袖の外側はややくぼむ。

遺物 古墳時代鬼高期のもの。

H-3号 竪穴住居跡



H-3 (南北) 1. 黒色土とロームの混上。砂質。2. 茶褐色土。ローム・焼土がわずかにまじる。3. 茶褐色土。ロームブロック。焼上、炭化物が多くまじる。

(東西及びカマド) 1. 砂質の茶褐色土。2. 茶褐色土。ロームブロックまじり。3. 黑褐色土と茶褐色土の混土。ロームブロックまじり。4. 茶褐色土。ロームブロックまじり。5. 黑褐色土。6. 黒色土と黒褐色土の混土。7. カクラン。8. 2に同じ。9. 棕褐色粘土ブロック。10. 黑色土。焼土まじり。11. 白色粘土と褐色土の混土。12. ローム。焼上、黑色土が少しまじる。13. 粘土と黑色土の混土。14. 白色粘土の混土。焼土がまじる。15. 焼土小粒と白色粘土のまじり。16. 黑色土。ローム、焼土がわずかにまじる。17. ローム。焼土粒、黑色土まじる。18. 焼土小粒にロームまじり。19. 白色粘土。20. ローム。わずかに黑色土。21. 白色粘土。焼土わずかまじる。22. 白色粘土。ローム、焼土まじる。23. ローム。24. 白色粘土ブロックに焼土まじり。25. 黑灰。26. 茶褐色土。焼土まじり。27. 烧土ブロック。28. 黑灰。29. 茶褐色土。ロームブロックまじり。

(カマド南北) 1. 2. 焼土ブロック。3. 5. 6. 焼土ブロックに粘土まじり。4. ローム。7. 8. 粘土ブロックに焼土まじり。9. ロームブロック。10. ローム。11. 黑灰。12. 13. 14に同じ。14. 灰と焼土ブロックまじり。

位置 東西幹線予定区の東端。検出住居跡群の東端になる。台地の東側斜面にあたり、南北に広がると推定される住居跡群の一部を成す。

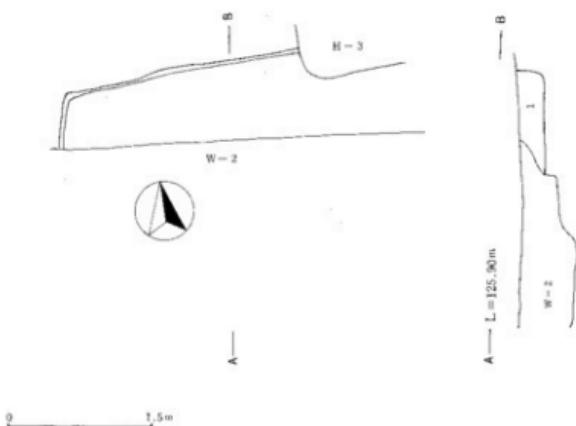
形状・規模 東西にやや長い長方形を呈す。東西3.8m、南北3.3m。面積は12.4m²を測る。各辺はほぼ直で、隅角も直に近い。壁はほぼ垂直で、しっかり掘られていた。壁現高は56~72cm。

床 固くしまった床面をもつ。カマド前は特に良くしまっていた。貼り床はない。北辺から東辺にかけて周溝が検出された。カマド南側に貯藏穴。70×50cmで深さ72cm。床面南西に浅いくぼみ。

重複関係 H-2、H-4と重複する。H-2より新しい。H-4とは明確ではないがH-3が新しいと考えられる。住居内を南北に走る溝状構造は埋上、形状からみて新しいもの。

遺物 古墳時代鬼高期のもの。

H-4号 竪穴住居跡



H-4 1. 茶褐色土、ロームまじり。

位置 東西幹線予定区内、H-2南で、H-3に一部重複しておりH-3より古いと考えられる。南半は溝により、東端は新しい溝状の掘削により失われている。

形状・規模 住居跡床面の北西部のみの検出のため全体の形状は不明であるが、北西端からみて東西に長い長方形か。現存部で東西2.6m、南北0.7m。現存の北辺、西辺は直に近く、北西の隅角は直に近い。

床 貼り床はない。比較的固くしまった床面をもつ。現状では柱穴等の施設は確認されなかった。

カマド 遺物の検出は見られたものの、カマドについては不明。溝によって削平されたものか。

遺物 遺物検出数は多くない。古墳時代鬼高期のもの。

H-5号 竪穴住居跡

位置 東西幹線と南北幹線の交点近く。西側は調査区外のため未調査。

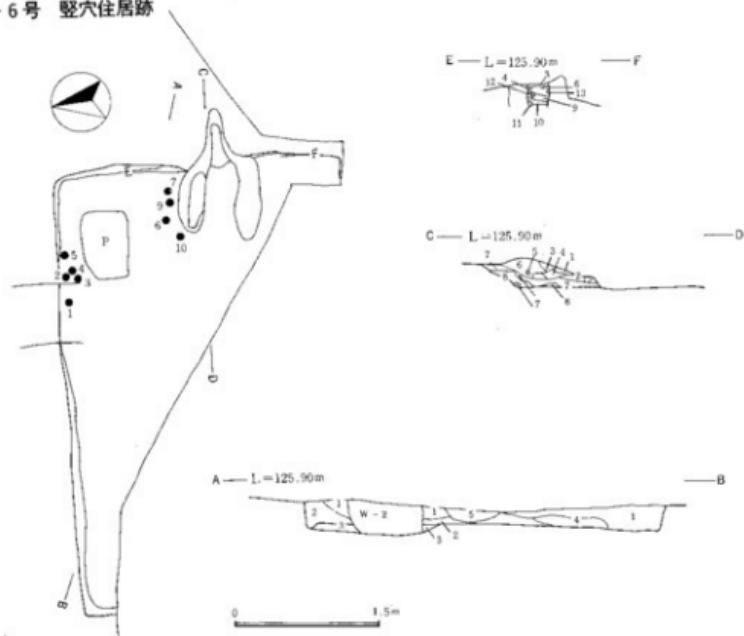
形状・規模 一部未調査であるが、二隅が検出されている。やや南北に長い長方形か。現存部で南北5.3m、東西4.2mを測る。隅角は直に近く、各辺も直に近い。

床 貼り床はないが、比較的しまった床面をもつ。北東隅に50×60cm、深さ23cmのピットをもつ。南西隅に50×50cm、深さ13cmのピットがある。これが柱穴とすると住居形状は正方形に近くなる。南東隅60×50cm、深さ75cmのピットは貯蔵穴か。

カマド 残存状態不良。東壁南半に住居内への長い袖部が残る。かなり北に偏して検出されている。

遺物 古墳時代鬼高期のもの。

H-6号 竪穴住居跡



H-6 1. 茶褐色土。2. 茶褐色土・ローム、焼土が多くまじる。3. ローム。4. 粘土ブロック、焼土ブロック、黒色土のまじり。5. 黒色土(溝)。

(カマド東西) 1. 黄褐色粘質土。焼土まじる。2. 黄褐色砂質土。焼土粒、白色粘土含む。3. 白色粘土。4. 灰色砂質土。焼土ツロック含む。5. 黑色土。砂質。6. 黄褐色粗砂質土。7. 黑褐色と暗褐色灰のまじり。8. 白色粘土。

(カマド南北) 9. 黑褐色土。白色粘土ブロック、焼土ブロックまじり。10. 6に近い。焼土ブロック灰を含む。11. 黑褐色粘質土・ローム、灰の混土。12. 白色粘土ブロック。13. 焼土ブロック。

位置 東西幹線予定区。検出住居群の北西。北半は調査予定地区外のため、北西端を検出して規模を確認したのみで全掘ではない。

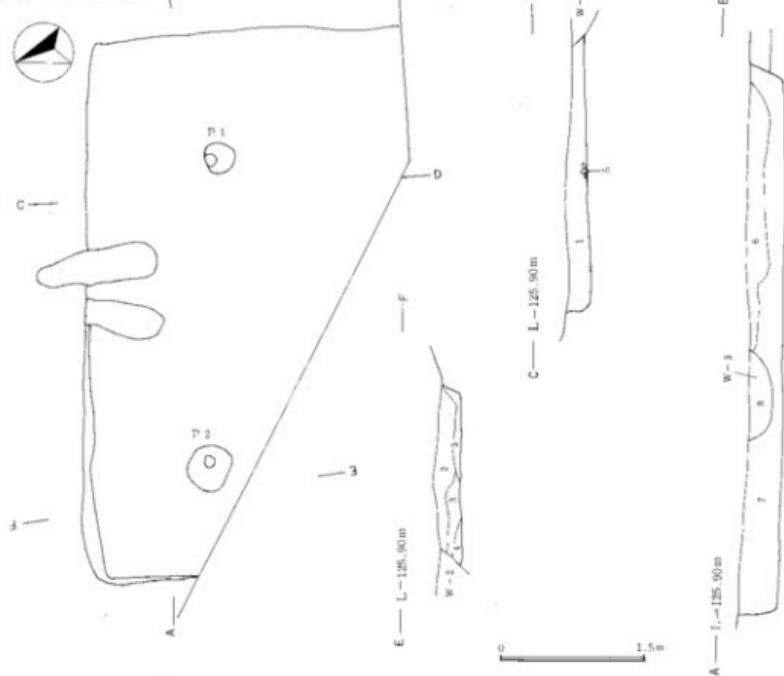
形状・規模 検出部より推定すると東西に長い長方形。現状で、東西4.5m、南北3.0m。面積は推定13.5m²。検出された南辺・西辺はほぼ直で、検出された南西、南東、北西の隅角はほぼ直に近い。

床 固くしまった床面をもつ。貼り床、周溝は確認されなかった。南西端に70×50cmの方形のピットをもつ。貯蔵穴としては位置は良いが、深さ73cmで深すぎ、実用としては不便な点があるためやや疑問である。

カマド 西辺中央部。総長140cm、住居内に袖80cmが張り出す。煙道はやや南に傾いて設けられている。煙道の傾斜は比較的ゆるやかである。

遺物 カマドそばより出土が多い。古墳時代の鬼高期のもの。

H-9号 竪穴住居跡



H-9 1. 茶褐色土。2. 基褐色土。焼土・ロームまじり。3. 基褐色土。焼土・粘土まじり。4. 茶褐色土。焼土と白色粘土の混土。5. 基褐色土。6. 基褐色土。7. 茶褐色土。ロームブロックまじり。8. (薄) 黒色土。砂層を含む。

位置 東西幹線予定区で、住居跡群が検出された南西端。H-2と重複する。H-9が新しい。南北は溝との重複で失われていて不明である。床面西側を南北に溝が走る。

形状・規模 現存の検出部からみると、東西にやや長い長方形もしくは方形と考えられる。現状で東西5.7m、南北3.3mを測る。検出部の北辺、西辺、東辺とともに直であり、北西、北東の隅角も直に近い。面積は現状で14.2m²。

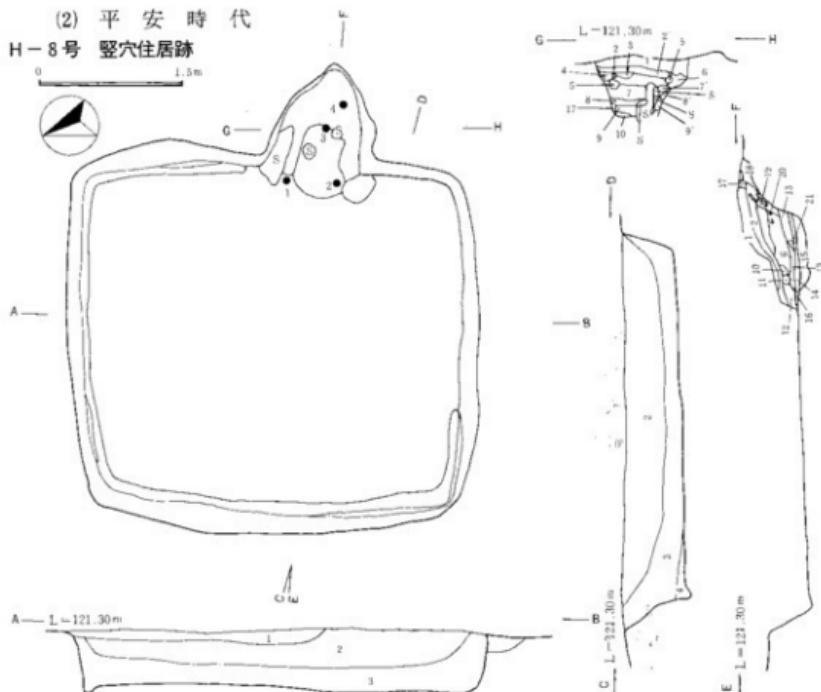
床 やや固くしまった床面をもつ。カマド前は固くしまっていた。貼り床はない。周溝は検出されなかった。

柱穴 床面2ヵ所。P₁(東) P₂(西)。P₁、32×30cm、深さ49cm。P₂、50×44cm、深さ71cm。やや細目ではあるが、深くしっかり掘られている。他の柱穴は床面南半にあったと推定されるが、溝との重複で削平されたものと考えられる。

カマド 北辺中央。削平により一部を欠く。総長124cm、袖長82cm。煙道の傾斜はゆるやかである。

埋土 住居跡の全面が焼土、炭化物を多く含む黑色土とロームの混土で埋められていた。人為的な埋転の可能性をもつ。

(2) 平安時代
H-8号 竪穴住居跡



H-8 1. 黒色土に耕作土混じる。2. 黒色土。3. 茶褐色土。4. 茶褐色土。5. 黒色土にロームブロックまじる。6. 黒褐色土。

(カマド) 1. 黒褐色粘質土。2. 茶褐色粘質土。2'. 2に焼土含む。3. 白色粘土に焼土ブロックを含む。4. 茶褐色土にロームブロックを含む。5. 白色粘土ブロックと灰質土層上。6. 再生土・粘土・焼土ブロック混じる。7. 白色粘土・褐色土・成土の混じる。7'. 褐色粘質土と粘土の混じる。8. 底白色粘土と褐色土・焼土ブロックの混じる。8'. 褐色粘質土に粘土まじる。9. 白色粘土に褐色土・焼土ブロック混じる。9'. 褐褐色粘質土。10. 黑褐色粘質土。11. 内色粘土にローム・成土の混じる。12. 褐褐色粘質土に焼土ブロックまじる。13. 焼土ブロック。14. 褐褐色土。15. 灰黒灰。17. 砂質ローム。18. 褐褐色土・燒土含む。19. 褐色粘質土・ローム・燒土を含む。20. 褐色粘質土に礫と焼土を含む。21. 白色粘土とローム・成土の混じる。

位置 南北幹線の南端に近い地区より検出。北の住居跡群とは時代が異なる平安時代の住居跡である。調査区内では一軒のみであるが、道路部分のみの限られた調査であるため、周辺に同時代の住居跡のある可能性は高い。

形状・規模 南北にやや長いが、ほぼ方形を呈す。東西3.5m、南北3.9m。面積は13.7m²。各辺とも直であり、隅角もほぼ直に近い。壁はしっかりした掘り込みで、直に近く掘られている。現壁高は41cm~44cmを測る。南辺東半分を除き周溝がめぐる。幅4~12cmで深さ5cm。

カマド 東辺の南よりに位置する。全長141cm。凝灰岩で両袖を作る。袖は壁下に接している。燃焼部はほぼ壁外になる。煙道は急な傾斜でやや南に偏してのびている。煙道の先には土師器壺を転用して置いてあった。

遺物 平安時代のもの。壺の他に鉄製刀子が出土している。

埋土上層は黑色土であるが、検出面では住居域よりも一まわり大きく、また、カマド上面は張り出し様で検出されていた。壁上部が早くに崩落し、上面の規模が平面的に広がったことがわかる。

その他の遺構

溝が3条検出されているが、調査区が限られているために部分的な検出にとどまった。土坑は1基のみ検出されている。H-7は欠番。

W-1 東西道路部の住居跡群の西端を南北に通る。塊形の断面をもち、底に砂層がみられる。B軽石を多く含む土層は耕作土直下であり、B軽石降下時にはW-1はほぼ埋められていたことがわかる。断面でみると徐々に浅くなっているようであり、砂層も含み、流水量は多かったようである。遺物が検出されていないため不明であるが、FA、FPを多く含む層をもつて、造られたのは古墳時代にさかのばるものか。

W-2 東西道路部の南側を東西に走る。埋土は比較的新しいものであり、近年のものか。

W-3 H-6、H-9内を南北に走る。表土下であり、住居跡を切っていることから、住居跡が埋まつた後であるが、それほど旧くない時期のものと考えられる。

HP-1 円形。96cm×100cm、深さ36cm。円形で垂直な壁。底面は平坦である。遺物の検出はみられなかつたが、埋土はそばの古墳期の住居跡に似ており、同時期のものか。

V ま と め

谷端遺跡では、住居跡8軒（うち7軒が古墳時代、1軒が平安時代）と土坑1基、溝3条が検出されている。昭和59年調査の小神明III遺跡の南に連なる地域がある。道部分のみの調査ではあるが、この地域の遺跡分布についての資料を得ることができた。土地改良対象地区は台地の東半分を占めるが、試掘結果からみると住居跡が形成されているのは、調査区のさらに東半分であり、さらに北東区と南東区に集中しているものと考えられる。

今回の土地改良対象区の西側の集落部には古墳が点在していたようで、昭和21年に群大で調査した上ノ山古墳があり、さらに付近より高壙出土がみられ、またH-8埋土中には埴輪片がみられた。

古墳時代には台地の西側には古墳があり、東側にはそれを支えた住居群があったと考えられる。その後住居跡はあまり作られなかつたようである。

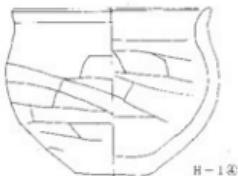
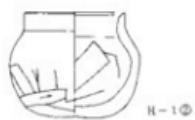
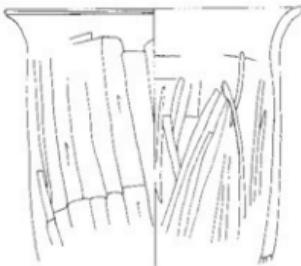
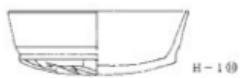
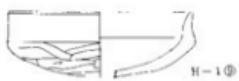
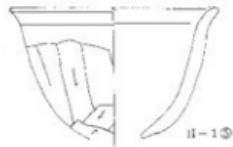
また、カマドについてみると、古墳時代のものでは北や西のものが多く（H-2、6、9）、冬の北西の風が強いこの地域では不便であったと思われるが、使用期間も短期間とは見られず、その辺の工夫があつたものとみられる。

住居施設でみると柱穴が検出されたものがH-9のみであり、柱の下に基礎板を置いた可能性もある。住居跡周囲にも係るピットは検出されていない。

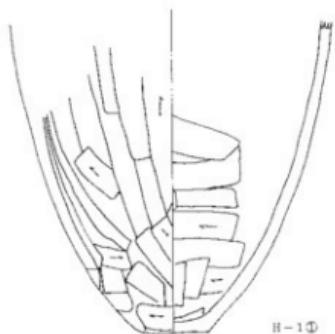
また、西南隅の「寄居」名の地点については、遺物は検出されず、東と北よりトレンチを際までいれたが「寄居」に係わる遺構は検出されなかつた。

遺物観察表

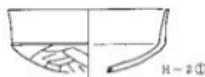
番号	器種	法量(①高②口径③底径)cm	技 法 等	胎 土	①色調 ②焼成 ③残存
H 1 - ①	土師甕	①16.7(現)②22.1(現)③4.9	(外面)ヘラ削 (内面)ヘラ削	石英	①にふい橙 ②やや粗 ③1/3
②	土師甕	①7.2②6.8	(外面)ヘラ削 (内面)ヘラ削	石英・輝石	①にふい橙 ②良好 ③1/3
③	土師甕	①17.2(現)②20.4	(外面)ヘラ削 (内面)ヘラ削	石英・輝石	①橙 ②良好 ③1/5
④	土師甕	①11.5②13.4	(外面)ヘラ削 (内面)ヘラ削	輝石	①にふい橙 ②やや不良 ③2/3
⑤	土師甕	①9.1(現)②14.3	(外面)ヘラ削 口縁横ナデ	輝石	①にふい黄橙 ②良好 ③1/8
⑥	土師甕	①3.8②12.4	(外面)ヘラ削 口縁横ナデ	石英	①橙 ②良好 ③4/5
⑦	土師甕	①11.7(現)②7.1	(外面)ヘラ削	小砂粒	①(内)褐色(外)灰褐色 ③下1/4
⑧	土師甕	①6.3②15.2	(外面)ヘラ削 口縁横ナデ	輝石・石英	①にふい黄橙 ②良好 ③5/6
⑨	土師甕	①4.5②12.4	(外面)ヘラ削 口縁横ナデ	輝石・石英	①にふい褐 ②良好 ③1/2
⑩	土師甕	①4.5②12.2	(外面)ヘラ削 口縁横ナデ	密	①にふい橙 ②良好 ③1/2
⑪	土師甕	①4.8②11.2	(外面)ヘラ削 口縁横ナデ	密	①にふい橙 ②良好 ③1/4
H 2 - ①	土師甕	①4.4②11.9	(外面)ヘラ削 口縁横ナデ	密	①橙 ②良好 ③1/5
②	土師甕	①14.7(現)②17.8	(外面)ヘラ削 口縁横ナデ	石英・輝石	①にふい橙 ②良好 ③1/6
③	土師甕	①5.2②13.6	(外面)ヘラ削 (内面)ヘラ削	小砂粒	①明赤褐 ②良好 ③1/2
④	土師甕	①4.6(現)②12.4	(外面)ヘラ削 口縁横ナデ	密	①橙 ②良好 ③1/4
⑤	土師甕	①8.8(現)②15.1	(外面)ヘラ削 口縁横ナデ	輝石	①にふい橙 ③1/2
H 3 - ①	土師甕	①4.5②14.5	(外面)ヘラ削 口縁横ナデ	密	①橙 ②良好 ③1/3
②	土師甕	①12.3(現)②18.5	(外面)ヘラ削 口縁横ナデ	石英・輝石	①橙 ③1/8
③	土師甕	①4.5②13.4	(外面)ヘラ削 口縁横ナデ	密	①にふい橙 ②良好 ③1/4
④	土師甕	①13.7(現)	(外面)ヘラ削	石英	①にふい橙 ③1/6
H 5 - ①	土師甕	①5.1②12.0	(外面)ヘラ削 (内面)ヘラ削	輝石	①明赤褐 ②良好 ③2/3
H 6 - ①	土師甕	①13.1②13.6③6.7	(外面)ヘラ削, ハケ目, 口縁横ナデ	石英・輝石	①橙 ②良好
②	土師甕	①14.0②12.9③5.0	(外面)ヘラ削 口縁横ナデ	石英・輝石	①明赤褐 ②良好 ③1/2完形
③	土師甕	①7.5②9.0	(外面)ヘラ削 口縁横ナデ	石英・輝石	①橙 ②良好
④	土師甕	①7.1(現)②9.3	口縁横ナデ	紫蘇輝石	①橙 ②良好 ③1/2
⑤	土師甕	①5.0②13.0	(外面)ヘラ削 口縁横ナデ	輝石・石英	①橙 ②良好 ③2/3
⑥	土師甕	①5.5②10.3	(外面)ヘラ削 口縁横ナデ	石英・酸化鉄	①にふい黄橙 ②良好 ③1/2
⑦	土師甕	①5.2②12.2	(外面)ヘラ削 口縁横ナデ	輝石・石英	①橙 ②良好 ③1/4
⑧	土師甕	①4.5(現)②12.1	(外面)ヘラ削 口縁横ナデ	紫蘇輝石・石英	①赤褐 ②良好 ③口徑1/3
⑨	土師甕	①4.8(現)②11.7	(外面)ヘラ削 口縁横ナデ	輝石・輝石	①赤橙 ②良好 ③1/3
H 6	土師甕	①4.5(現)②11.0		石英・輝石	①橙 ②良好 ③1/4
H 6	土師甕	①4.2(現)②11.0	(外面)ヘラ削	輝石・酸化鉄	①にふい橙 ②良好 ③1/6
H 8 - ①	土師甕	①21.2(現)②21.5	(外面)ヘラ削 (内面)ヘラ削	小石	①橙 ②良好 ③上半4/5
②	土師甕	①17.9(現)②20.7	(外面)ヘラ削 (内面)ヘラ削	輝石・輝石	①橙 ②良好 ③上半1/2
③	土師甕	①20.4(現)②21.4	(外面)ヘラ削 口縁横ナデ		①明赤褐 ②良好 ③上半2/3
④	土師甕	①13.7(現)②21.6	(外面)ヘラ削 口縁横ナデ	輝石・輝石・石英	①橙 ②良好 ③上半1/8



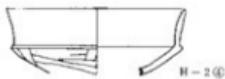
0 10cm



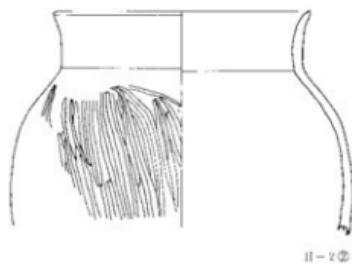
H-1 ♂



H-2 ♂



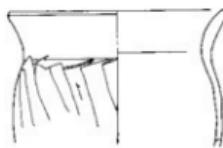
H-2 ♂



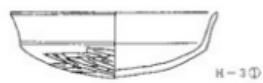
H-2 ♂



H-2 ♂



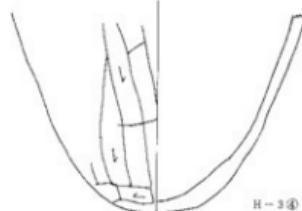
H-2 ♂



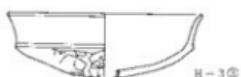
H-3 ♂



H-3 ♂



H-3 ♂

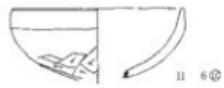
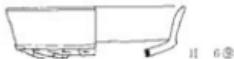
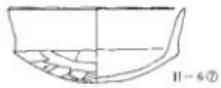
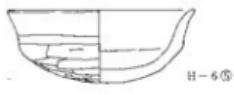
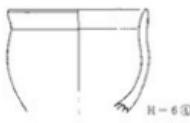
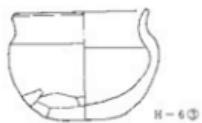
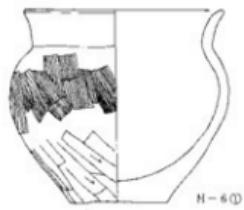


H-3 ♂

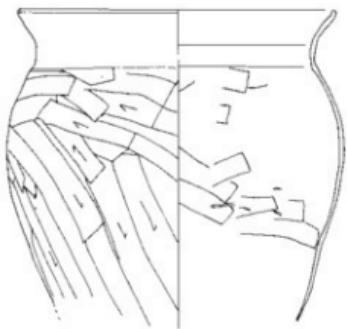


H-5 ♂

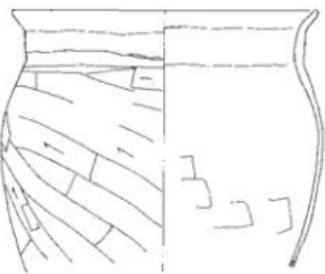
0 10mm



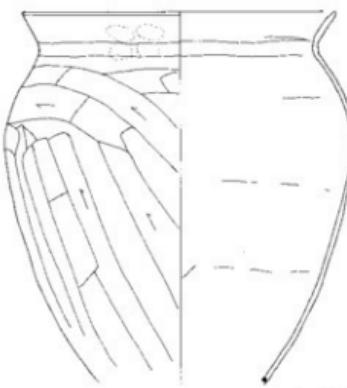
0 10cm



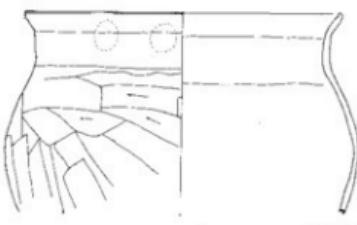
H-8①



H-8②



H-8③



H-8④

0 10cm



H-1号竖穴住居跡



H-2号竖穴住居跡



調査区(中央区),〔東より〕



H-3号竪穴住居跡



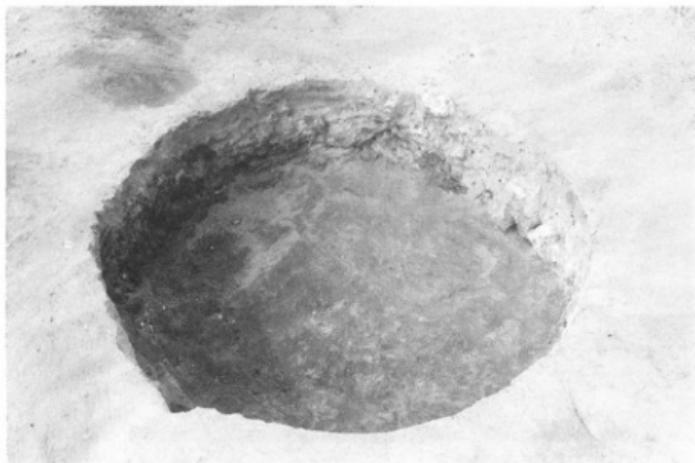
H-6号竖穴住居跡



H-9号竖穴住居跡



H-8号竖穴住居跡



HP-1号土坑



谷 端 遺 跡

印刷 平成 3年 3月20日

発行 平成 3年 3月30日

発行 前橋市教育委員会

印刷 上毎印刷工業株式会社

